

べし。

○服部元好傳話

舊傳に云ふ。元好は觀音町に居住し、醫師たりしかど、狂歌に長じて其の名高く、即興の秀句今に至り古老の口碑に残れり。或時觀音町出火して居宅焼亡せしに、左の句を張文す。

元好が家の黒焼なに、せん

右家の焼跡へ張文せしを見て、元好取敢へず。

日備や大工の腹薬なり

と書添へたりとぞ。又加藤惟寅の蘭山私記に云ふ。寶曆十一年江戸にて志道軒と云ふ長壽人、百八歳にて歿す。辭世の句。

いやなれど迎が来れば是非もなし

ゆきてなぶらん釋迦と彌陀とを

諸人もてはやしける。先年觀音町邊に服部元好といふ醫師あり。狂歌に名高し。終焉の頃は冬季なりしが、辭世の句に、

呼びに来ていやといはれず冬の夜に

末は知らねど療治しに行く

右元好が句は、志道軒が作よりは拔群に面白しとあり。

○市川彌五兵衛舊邸傳話

混見摘寫に云ふ。微妙公御代、市川彌五兵衛といふものゝ親は高知も賜はる處、梓彌五兵衛跡式相續の時減少して小身に成る。然るに其頃諸士居屋鋪檢地打たせらるゝに、彌五兵衛居屋鋪は卯辰觀音町の邊也。是へも檢地打入るゝ處、親時代の屋鋪故に事の外廣く、何かと及難澁、檢地を入れさせず。殊に平生等不<sub>レ</sub>宜品々有<sub>レ</sub>之故か、御憤り被遊、奥村因幡奉りて、宅に於て御横目茨木源五左衛門・山崎小左衛門爲捕手、惣組小頭森川五郎右衛門・寺尾勘助兩人に被仰渡。扱因幡被申は、彌五兵衛は勇者之由、輕々敷悔るべからずと。于時山崎小右衛門、勇者に候へば一段之儀、憶病者は風を聞き立退き、仕留がたく御座候と申す。扱市川方へ朝がけに仕かけたり。輕卒二拾人にて取卷き、一番手森川五郎右衛門、門を明くるや否大聲にて、子細有りて懸込申す、御かくまひ被申と呼はり、奥を指して懸込む。二番手寺尾勘助は、狼藉もの遁すまじと追込みたり。下女は竈に飯を

炊き居けるが、彌五兵衛は脇差をくはへ、帶をしめ直し、奥の間より出でける處、森川得たりやおうと無手と組む。彌五兵衛勇力のものなる故に、寺尾と兩人を左右に請けて組合ひたり。然る處御横目の内にも候哉、切殺いたし候様に被<sub>レ</sub>仰出也。そこを放せと云ふ。森川云ふ。捕手の一番は私にて候と、言葉をかはして振放すを、其儘伐殺したり。死骸は玄門寺にて葬りけり。口の内に何やら有<sub>レ</sub>之に付き開き見候へば、森川拵組合ひける時、鎖鉢巻にくらひ付き、鎖口中に残り有<sub>レ</sub>之と。後玄門寺住僧、其頃小僧にて見たる者咄也。市川身上五百石許也。森川に二拾俵加増、寺尾は拾五俵加増被<sub>レ</sub>下と。則今の町下代森川政右衛門祖父也。とあり。但し今の世本、市川を市橋に作るは誤也。また懷惠夜話に云ふ。御射手組市川右馬介と申者、勝手能き私者にて、虚病を構へ、御奉公をも不勤引籠在に付、山崎小右衛門等爲檢使捕者に被<sub>レ</sub>仰付旨、奥村壹岐宅にて被<sub>レ</sub>申渡。壹岐曰く、右馬介は弓を能く射、其上甲斐々々敷者也。其氣遣可有<sub>レ</sub>之。小右衛門曰く、臆病者に候へば逃走る氣遣之處、甲斐々々敷者先以安堵仕由挨拶す。扱捕手の足輕共

呼出し、右馬介氣取候て、弓拵射出し候者、大勢手負怪我人出來可<sub>レ</sub>申。欠込有<sub>レ</sub>之候間出し可<sub>レ</sub>申由申させ、二三人足輕を遣し、外の人數は扱影にかくし置、右馬介出るを捕可<sub>レ</sub>申と也。足輕之内森川五郎右衛門と云ふ者進み出で、右馬介は私捕可<sub>レ</sub>申と云ふ。其躰輕忽にして、事の外身をふるはし、氣揚りたる躰也。右馬介宅は淺野川河原邊也。兼て言談の如く、足輕共を遣し、欠込人有<sub>レ</sub>之吟味可<sub>レ</sub>仕由玄關にて呼はらせ、森川は此者共に不<sub>レ</sub>構、勝手口の方へ廻り候處、右馬助右之音を聞き、大脇刺をさし、朝の事にて食後に候哉楊枝をくはへ、露地下駄をはき、脊戸口の方より、何事に候哉、左やうの者は居らずと申出でけるを、五郎右衛門捕つたりと聲を懸け組付き、上を下へと組合ふ音に、何茂欠付けうろたへ、森川共に切付け、五郎右衛門も深手負ひ放したり。市川は大勢にてすたくゝに仕り、刀の上へ切重ね、何れもさゝらの如く成申由。山本源右衛門親瀨兵衛も、御徒組にて罷越、後脇田如鐵方へ參、此咄仕。其方も切候哉と申に付、成程切候て刀捨り申由申上候へば、其段は不<sub>レ</sub>苦。ヶ様之節、能く死候て切るに不及とて捨置候